



頼朝義経対面場面における『義経記』独自記事：  
『義経記』の枠組みに関する試論として

藪本, 勝治

---

(Citation)

国文学研究ノート, 43:1-15

(Issue Date)

2008-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81012380>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012380>



# 頼朝義経対面場面における『義経記』独自記事 ——『義経記』の枠組みに関する試論として——

藪本 勝治

はじめに

『義経記』は早く柳田国男氏により「非常な寄せ集めの継ぎはぎで、従つて不必要に引延ばしてある。一言でいふならばまづ感心せぬ本である。」と評された<sup>(1)</sup>。以来現在に至るまで、その一貫性を欠如した性質によつて一般的な軍記の枠内から遠ざけて論じられてきたと言える<sup>(2)</sup>。例えば大津雄一氏はその金字塔的著書『軍記と王権のイデオロギー』において『将門記』から『心永記』に至るまで多様な軍記物語を俎上に載せ、軍記一般の論理的枠組みとして「王権の絶対性の物語」という視角を提出された<sup>(3)</sup>。氏の鮮やかな分析により、多くの軍記が王権のイデオロギーを基層構造として内包していることが明らかにされた<sup>(4)</sup>。したが、同書の分析対象に『義経記』は入っていない<sup>(4)</sup>。

そこで本稿では、大津氏の路線を継承して物語内部の権力構造に注目しつつ、『義経記』における、ある一貫した論理的枠組みの一端を説明することを目指す。方法として、巻第四「頼朝義経対面の事」における『義経記』独自記事に焦点を当て、

享受者がこの場面を、ひいては「義経の物語」全体をいかに捉えていたか、という点を視野に入れて検討する<sup>(5)</sup>。

本稿が主な分析対象とする頼朝と義経との対面場面は、和辻哲郎氏が指摘する通り、『義経記』前半最大の山場であり、『義経記』の中で義経が唯一表立つて評価される場面でもある。逆に言えば、頼朝との接触を境に義経が高みから没落し悲劇の主人公となつてゆく、重要な転換点である。そのため複数の論者により研究がなされているが、本場面の叙述に特徴的に現れる源氏先祖への言説についてはさほど注目されることがなかった<sup>(7)</sup>。しかし『義経記』の享受者にとつて、本場面で源氏先祖の名が語られることは何らかの意味を持っていたのではないだろうか。例えば鈴木彰氏は、中世人の『平家物語』享受における「側面として、先祖の系譜が強く意識されたことを論じられている<sup>(8)</sup>。『平家物語』を下敷きとしている『義経記』の場合においても、享受者が義経の先祖の系譜に関心を払っていたという見方はある程度の蓋然性が見込まれるはずである。そのような見通しのもとに、以下、この場面に多出する源氏先祖への

言説を分析してゆくことにしたい。

### 1. 「頼朝義経対面事」の源氏先祖への言説

それでは、巻第四「頼朝義経対面の事」における源氏先祖への言説をみてゆこう。まずは当該場面の文脈を確認しておく。伊豆で挙兵した頼朝は緒戦で敗北したものの、海路安房へ渡り、板東の武士を続々と味方に付けながら西進する。奥州の秀衡のもとで庇護を受けていた義経は頼朝挙兵の報を聞き、手勢を打ち連れて兄の軍を追う。そして駿河の浮島が原にて、ついに頼朝と合流する。かくして頼朝義経兄弟は対面を果たし、互いに涙して語り合う。頼朝は義経に、噂は聞いていたものの幼少以来の再会であり、参軍してくれて嬉しい、東国の統率と平氏の追討を同時にはできないため信頼の置ける代官を欲していた、ということ語り、続けて先祖の名を口にする。長文となるが、頼朝の台詞の途中から引用しよう。<sup>(9)</sup>

今御辺を待ち付け参らせて候へば、故頭殿の生き返らせ給ひたるやうにこそ存じ候へ。我らが先祖、八幡殿二三年の合戦に、むなうの城を攻められしに、大勢皆亡ぼされて、無勢になりて、厨川の端に降り下りて、幣帛を捧げて、王城を伏し拝む。『南無八幡大菩薩と御覚えを改めず、今度の寿命を助けて、本意を遂げさせて賜へ』と祈誓せられければ、まことに八幡大菩薩感応にやありけん、都におはする八幡殿の御弟、刑部少輔義光、内裏に候はれけるが、俄

かに内裏を紛れ出で給ふ。奥州の覺束なければとて、二百余騎にて馳せ下られける。路次の勢打ち加はり、三千余騎にて、厨川の端に馳せ来たつて、八幡殿と一つになりて、終に奥州を従へけり。その時の御心も、頼朝が御辺を待ち得参らせたる心も、いかでかこれには勝るべき。今日より後は、魚と水との如くにして、先祖の恥を清め、亡魂の憤りを休めんとは思し召されずや。御同心に候はば、尤も然るべし」と宣ひも敢へず、涙を流し給ひけり。御曹司とかくの御返事もなくして、袂をぞ絞られる。これを見奉る大名小名互ひの心中、さこそと推し量られて皆袖をぞ濡らされける。暫くありて御曹司申されけるは「仰せのごとく幼少の時、御目にかかりて候ふやらん。配所へ御下りの後は、義経も山科に候ひしが、七歳になり候ふ時、鞍馬に候ひて、十六歳まで形の如く学問を仕り、さても京都に候ふべかりしを、平家内々方便を作る由承り候ひし間、奥州へ下向仕り、秀衡を頼みて候ひつるが、御謀反の由承り、取る物も取り敢へず馳せ参る。今君を見奉り候へば、故頭殿の御見参に参り候ふ心地してこそ存じ候へ。命をば故頭殿に参らせ、身をば君に参らす上は、いかが仰せに従ひ参らせでは候ふべき」と申されけるこそ哀れなれ。さてこそ、<sup>(10)</sup>この御曹司を大將軍にて、平家の討つ手に向けられける。

(巻第四「頼朝義経対面の事」p. 161~162)

ここでは実に三人の源氏先祖が引き合いに出されている。まず、頼朝が義経を「故頭殿」つまり兄弟の父義朝に喩える。続

いて同じく頼朝が、自軍への義経の参軍を、「八幡殿」つまり兄弟にとつて三代の祖父(11)義家の軍への「八幡殿の御弟、刑部少輔義光」の参軍に喩える。このように頼朝は、現在における自分たちを過去における自分たちの先祖に喩えた上で、挙兵の動機付けとして源氏の系譜意識を強調して協力を要請している。それに対して義経が頼朝を「故頭殿」つまり義朝に喩えて忠誠を誓う。この描写から、頼朝の挙兵と義経の参軍という『義経記』における転換点に、源氏の系譜が強く意識されていることがわかる。

ではひとまずプレテクスト群との比較により、この本文がどのようにに生成されたのかという点をみてゆこう。その作業から、『義経記』本文の生まれた必然性と、プレテクストからはみ出してゆく独自性を測定したい。

## 2. 本文の生成過程

本場面のプレテクストと言える諸テクストの先相言説に関する要素を大まかに抽象すると、次の表のようになった。比較対象とした作品はおおよそその成立年代順に並べてあり、「後三年」は『奥州後三年記』、「延慶本」「四部本」はそれぞれ『平家物語』の延慶本・四部合戦状本、「盛衰記」は『源平盛衰記』、「闘静録」は『源平闘静録』、「平治物語」は学習院本『平治物語』を指す。「内容」欄の記述がある場合は○、無い場合は×の記号で表している(△の部分の後述)。

話者	頼朝	義家	義経
内容	義経を義朝に喩える	義経を義家	義経を義朝
後三年	×	×	×
吾妻鏡	×	×	×
延慶本	×	×	×
四部本	×	×	×
盛衰記	○	△(義綱)	×
闘静録	○	○	×
平治物語	×	×	×
義経記	○	○	○

この表から、『義経記』の頼朝義経対面場面における先相言説の生成過程を推測することができる。時代を追って簡単に述べると、以下ようになる。

まず平安末期、『奥州後三年記』において、義家が自軍に参軍した義光を父頼義に喩える記述が生まれる。次に鎌倉後期、『吾妻鏡』において、頼朝が義経と対面した際に義家・義光の対面を引き合いに出す記述が生まれる。また同じ頃、延慶本や四部本の『平家物語』において、頼朝が義経と対面した際に義経を父義朝に喩える記述が生まれる。ここまでを第一段階としよう。続いて第二段階として、南北朝前期、『源平盛衰記』や『源平闘静録』において、第二段階で出揃った材料群を全て取り込んだ頼朝義経対面場面の記述が出来上がる。『源平盛衰記』は義光を「義綱」とするが(表中△の部分)、文脈から考えてこれは「義光」の誤記と考えて問題ない<sup>(13)</sup>。学習院本『平治物語』では頼朝が義経を義朝に喩える記述を欠くが、第二段階の定型を踏襲していると言えよう。そして『義経記』もまた、義家が自軍に参軍した義光を父頼義に喩える記述を欠くものの、第二

段階の定型をなぞっていると見て間違いない。

さて、プレテクスととの比較、および本文の生成過程を推測する作業から、この場面で頼朝が先祖の例を引き合いに出すのは一種の定型であったことが明らかになった。『義経記』における当場面の重要性が揺らぐわけではないが、こうなると源氏先祖への系譜意識における『義経記』の特殊性は弱まるようにも感じられる。しかし以上を踏まえた上で注目されるのは、『義経記』における二つの独自記事である。すなわち義家が八幡神に祈る記述と、義経が頼朝を「故頭殿」に喩える記述との二つである。

徳竹氏は他場面との比較から、この場面の描かれ方を「偶然の産物ではなく、依拠資料を物語の志向に沿って意図的に改変したものである可能性が高い」と述べられている<sup>(14)</sup>。とすれば、プレテクスとはみ出す『義経記』独自記事には少なからず『義経記』内部に特有の論理が見出せるはずである。本稿も徳竹氏と同様の見地を取りつつ、以下にこれらの独自記事の持つ意味について検討していきたい。方法として、『義経記』全体を通して源氏先祖への言説がどのように現れているのか、という点を分析してゆく。その作業を通して、『義経記』内部において源氏先祖への言説が帯びる論理、および当該場面の独自記事の持つ意味を解明していきたい。

### 3. 『義経記』における源氏先祖への言説

『義経記』全体では、源氏の先祖に関してどのように語る

れているのだろうか。試みに、頼朝義経兄弟の四代の祖父頼義、三代の祖父義家、祖父為義、父義朝等に関する記事を調査した<sup>(15)</sup>。これをまとめたものが、末尾に掲げた表である。なお、義経の出自を言う文脈で先祖の名が挙げられたものには傍線を付して示し、巻第四「頼朝義経対面の事」は次章で言及するため囲み線を付している<sup>(16)</sup>。

表を一見して明らかかなように、源氏の先祖に関する言説の大半が、義経の出自を言う文脈で現れている。これは義経の一代記たる『義経記』の志向上当然とも言えるだろう。以下、順を追って見てゆく。

『義経記』冒頭は、義経を父義朝の子として位置づける記述から始まる。

本朝の昔をたづぬるに、田村、利仁、将門、純友、保昌、頼光、漢の樊噲、陳平、張良は、武勇といへども、名をのみ聞きて目には見ず。目のあたりに芸を世にほどこし、万人の目をおどろかし給ひしは、下野の左馬頭義朝の末の子、源九郎義経とて、わが朝にならびなき名将軍にてぞおはしける。

(巻第一「義朝都落の事」p. 19)

物語が始まり、まず地の文によって、次に「左馬頭殿の御乳母子に、鎌田次郎正清が子息」である四条室町の法師少進坊によつて、義経が源氏の子孫であることが語られる。少進坊は源氏再起を企んで鞍馬の牛若のもとへ出向き、牛若に次のように耳打ちする。

「君は知ろし召さで今まで思し召し召し候はぬか。君は清和天

皇の十代の御末、左馬頭殿の御子、かく申すは、頭殿の御乳母子に鎌田次郎兵衛が子にて候。御一門の源氏国々に打ち籠められて御渡り候ふをば心憂しとは思ひ召されず候ふかや」

(巻第一「少進坊の事」P. 29～30)

続いて源氏の子孫であることを自覚した義経は、奥州の金売り商人である吉次から源氏先祖による奥州征討の事績を聞き、自ら義朝の実子と名乗る。

「汝なれば知らずるぞ。人に披露はあるべからず。われこそ左馬頭の子にてあれ。秀衡がもとへ言づけせばや。何時頃か返事を取りてくれんずる」

(巻第一「遮那王殿鞍馬出の事」P. 41)

しかし、平家全盛の世にあつて源氏の子孫は危険人物として扱われる状況が前提にあることも確かである。吉次とともに奥州へ向かう義経は正体を隠しての途次を強いられる。とはいへ、例えば「吉次が年ごろの知人」である鏡の宿の長者は義経の正体を見破るが、六波羅へ通報するどころか逆に感動し、協力を申し出る。

長者はらはらと涙を流し、「あはれなることもかな。何しに生きてゐて、初めて憂き事を見るらん。ただむかしの御事、今の心地して覚ゆるぞや。この殿の打ち振る舞ひ給へるおもかげ姿、故左馬頭殿次男、中宮大夫殿に少しも違ひ給はぬものかな。もし言葉の末を以て具し奉るかや。保元、平治よりこのかた、源氏の子孫、ここかしこに打ち籠

められておはする。成人して思ひ立ち給ふことあらば、よく拵へ奉りて具し参らせ給へ。壁に耳、石に口といふ事あり。紅は園に植ゑて隠せども、色ある物は隠れなし」と申しければ、吉次、「何くれにても候はず。身がため親しき者にて候ふ」と言ひければ、長者、「人は何とも言はば言へ」とて、座敷を立ちて、少き人の袖を引き奉る。

(巻第二「鏡の宿吉次が宿に強盗の入る事」P. 49～50)

義朝の子であるということが一種の権威として作用し、周囲をひれ伏させ、その権威に支えられて義経が庇護者や臣下を増やしてゆく様がよくわかる挿話である。以後も義経は事毎に自ら義朝の実子と名乗る。例えば巻第二「伊勢三郎義経の臣下に初めてなる事」では、義経は伊勢三郎義盛に次のように述べる。

「これは奥州の方へ下る者なり。平治の乱れに滅びし下野の左馬頭の末子、牛若とて、鞍馬に学問して候ひしが、今は男になりて、左馬の九郎義経と申すなり。奥州の秀衡を頼みて下り候。今は自然として知人にこそなり奉らめ」

(巻第二「伊勢三郎義経の臣下にはじめて成る事」P. 72)

これを聞いた義盛は涙を流し、源氏は「われわれが為には重代の君」であると言ひ、以後義経の郎等として従ひ付くところとなる。『義経記』前半に語られる義経の活躍を支えたのは、基本的に「左馬頭の子」という血筋にまつわる権威であったと言えそうである。<sup>(17)</sup>

源氏の先祖に関する言説は巻第一、巻第二に集中しているが、頼朝の登場を境に義朝が義経との直系性で語られる場面が激減

し、特に義経本人が自らの出自を言う状況に関しては巻第四「腰越の申状の事」以降皆無である。表を見てわかる通り、頼朝に結びつけた先祖言説や源氏以外の人物が義経との関係を主張するために持ち出した源氏先祖の言説がほとんどとなる。三箇所ほど引用しておく。

伊勢の加藤申しけるは、「悲しきかなや、保元に為義切られ給ひ、平治に義朝討たれ給ひて後は、源氏の子孫栄え給はで、弓馬の名を埋んで星霜を送り給ひ、偶々源氏思ひ立ち給へば、不運の宮に与し參らせて、世を損じ給ふこそ悲しけれ」と申しければ、兵衛佐殿仰せられけるは、「かく心弱くな思ひこそ。八幡大菩薩いかでか思し召し捨てさせ給ふべき」と諫め給ひけるこそ頼もしけれ。

(巻第三「頼朝謀反の事」P. 147～148)

忠信これを聞きて、縁の上に立ちたる部の下をがばと突き落として、矢取つて差し矧げ申しけるは、「江馬小四郎殿に申すべき事あり。あはれ御辺達は、法をも知り給はぬものかな。保元・平治の合戦と申すは、上と上との御事なれば、内裏にも御所にも恐れなし、思ふ様にこそ振る舞ひしか。これはそれに似るべきにあらず。某と御辺とは私軍にてこそあれ、鎌倉殿も、左馬頭殿の御君達、我らが殿も頭殿の御子息ぞかし。例へば人の讒言によりて御兄弟の御仲不和になり給ふとも、これに現在無実なれば、思し召しも直したらん時は、あはれ一門の煩ひかな」と言ひも果てず縁より下へ飛んで落ち、雨打に立ちて差し詰め差し詰め散々に

射る。

(巻第六「忠信最期の事」P. 305)

兼房言ひけるは、「唐土、天竺は知らず、我が朝において、御館の御座所に馬に乗りながら控ゆべきものは覚えす。かく言ふ者は、誰とか思ふ。清和天皇に十代の御末、八幡殿には四代の孫、鎌倉殿の御弟、九郎大夫判官の御内に、十郎権頭兼房、元は久我大臣殿の侍、今は源氏の郎等、禁壇を欺く程の剛の者、いざ、手並みの程を見せん」とて、長崎太郎が馬手の鎧の草摺、半枚かけて、膝口、鎧の鉦鉦草、馬の折骨五枚かけて斬り付けたり。

(巻第八「兼房が最期の事」P. 466～467)

頼朝に追われる身となる後半の義経は、素性を明かせば罪人として捕縛され鎌倉に連行されてしまうだろう。そのような逃避行において、義経が「左馬頭の子」と名乗ることができないのは一方では当然のことと言える。しかしまた一方では、平氏にみつからぬよう素性を隠す前半の義経が、その活躍を「左馬頭の子」という血筋の権威に支えられていたことも想起される。前半と後半の義経はいずれも、当時隆盛の公権力から敵視される不遇の主人公である。しかしこのように先祖への言説に注目する時、両者の構造的な位相差が明らかとなる。すなわち、前半の義経は「左馬頭の子」という源氏の系譜的正当性を自分のものとして主張できた。それに対して後半の義経は、兄頼朝がその正当性を幕府権力の正当性として独占したため、「左馬頭の子」という源氏の系譜的正当性を自分のものとして主張でき

ない、という位相差である。

この決定的な位相差を生み出したのは、物語の背景にある権力的な対立の構図の転換であると言えよう。優位にある平氏に対して劣位にある源氏、という構図から、優位にある頼朝に対して劣位にある義経、という構図への転換である。前者は義経にとつて明快な対立関係であり、敵対者に対して自己の正当性はひとつの武器となりうる。しかし後者はそもそも対立自体が正当性の抗争という明快な構図を描ける性質のものではない。頼朝と義経はいずれも「左馬頭の子」という源氏の系譜的正当性を共有しているはずである。しかし『義経記』の叙述はそうようになっていない、ということが明らかになった。頼朝と義経の対立関係は「左馬頭の子」という源氏の系譜的正当性が頼朝に占有されたことから生まれた優劣関係に基づいて表現されている、ということである<sup>(18)</sup>。

以上見てきたように、源氏先祖の言説に注目することで、源氏の系譜的正当性とその移行という『義経記』に一貫した叙述原理を見出すことができた。それでは、そのような権力的構造の転換点である頼朝義経対面場面における独自記事からは、どのような意味が見出せるのだろうか。

#### 4. 『義経記』独自記事の持つ意味

それでは、『義経記』における二つの独自記事を解釈してゆこう。すなわち、義家が八幡神に祈る記述と、義経が頼朝を「故

頭殿」に喩える記述の発するメッセージの解明である。

論の展開上、先に義経が頼朝を「故頭殿」に喩える記述から考察する。但し、この記述はそもそも文脈的にやや問題を抱えている。義経の台詞にある「故頭殿」義朝は、すぐ前に頼朝が義経を喩えて称した先祖であった。それを義経が頼朝を喩えて称する先祖として引き合いに出しているのは、一見して不自然の感がある、という問題である<sup>(19)</sup>。『義経記』には度々文脈の不整合や非合理が指摘される。しかしそれらは、整合性や合理性とは異質の論理に基づいた叙述であると考えるべきであろう<sup>(21)</sup>。ならば頼朝を「故頭殿」に喩える記述からも、不自然を犯してまで指示すべきメッセージを読み取ることができるとは思えない。

義家と義光の説話は、『吾妻鏡』では合戦における兄弟対面の佳例として、『源平盛衰記』では頼朝の喜びを喩えるために持ち出されている。また『平治物語』では一種の定型として現れ、積極的な意味を見出しにくくなっている。それでは『義経記』では、義家と義光の説話はどのように機能しているのだろうか。それを考えるに当たって、ここでは、義経と頼朝の今後を享受者が既に知っているという観点を導入したい。他の本と違い義経の一代記である『義経記』の構成上、この場面がどのような位置に当たるのかということが、室町期当時の享受者達には潜在的にせよ意識されていたものと思われる<sup>(22)</sup>。

先述の通り、本場面は〈義経の物語〉における転換点である。

この「頼朝義経対面の事」を中心とした頼朝の挙兵と平氏打倒譚以前を前半、以後を後半と考えることができる。前半におけ

る物語内部の対立関係は、絶対的優位にある平氏勢力に対して劣位にある源氏の一族、という枠組みであった。それが後半には、絶対的優位にある頼朝一派に対して劣位にある義経一派、という枠組みへとシフトする。このとき、基本的に読者の視点は一貫して劣位にある義経に固定されている。但し前半においては義経に源氏先祖の系譜を語る力が備わっていた。そのため、義経が立ちほだかる敵を次々と倒してゆく一種の明るさが漂っていた。それが後半になると、義経は源氏の系譜的正当性を主張できなくなり、ひたすら身をやつす悲劇的な人物像へと変貌してゆく。おそらくこの場面を享受する室町期当時の人々の脳裏には、そういった文脈が了解されていた。この文脈を踏まえた上で頼朝義経対面場面が享受されたとすれば、頼朝が義経に向かって源氏先祖の名を挙げ、現状になぞらえて語りかける言説は、享受者にある示唆を与えたのではないだろうか。

ここまで義経が主張してきた源氏先祖の系譜的正当性が頼朝によって主張され始め、これ以降義経は頼朝に追われる身となってその権利を失う。比喩的に言えば、この場面で起こったことは源氏先祖の系譜語的正当性を主張する権利の、頼朝による収奪であると言える。義経の側からすれば、源氏の系譜的正当性からの疎外、あるいは放逐である。

そもそも源氏の系譜において、義家は嫡流であるのに対して義光は庶流である。このことは室町期において常識の範疇であった。<sup>(23)</sup> 頼朝は自己と義経を義家と義光に重ね、義経に対して自己の系譜的正当性を主張している。〈義経の物語〉を知る当

時の享受者には、そのような解釈がなされただろう。そして義経がそれに呼応する形で、自分よりも頼朝こそ義朝の系譜を名乗るにふさわしいことを宣言する。つまり「故頭殿」の直喩される対象が義経から頼朝へ逆転することは、〈義経の物語〉の文脈を知る当時の享受者にとって、この場面で降源氏の系譜的正当性が頼朝に移り、義経が転落してゆくことを暗示する機能を担っていたことになる。

このように考えると、もう一つの『義経記』独自記事である、義家が八幡神に祈る記述もまた、重要な意味を帯びたものとなつてくる。言うまでもなく「八幡大菩薩」とは源氏の氏神である。そして義家が「八幡太郎」「八幡殿」と呼称されることからわかる通り、源氏と八幡神との強い結びつきは室町期において一般的に義家を起点として想起された。<sup>(25)</sup> 『義経記』における八幡神の用例は全二十五例が見られるが、徳竹氏や中村和子氏によって「源氏の守護神」として描かれていることが指摘されている。<sup>(26)</sup> 全体としては両者の見解に従つてよいと思われるが、たとえば巻第四「義経都落の事」に見える次の本文は義経自身と八幡神との関係をよく示すものとして注目に値する。

弁慶申しけるは、「この雲の景気を見て候ふに、よも風雲にては候はじ。君は何時の程に思し召し忘れさせ給ひて候ふぞ。平家を攻めさせ給ひし時、平家の公達多く浪の底に屍を沈め、苔の下に骨を埋み給ひし時、仰せられ候ひし言の今の様にこそ候へ。『我らは敵島の明神の神罰なれば力及ばず。源氏は八幡の護り給へば、事に重ね日に添へて、

安穩なり。源氏の大将軍においては、我ら悪靈、死靈とならん」と仰せられ候ひしぞかし。いか様にても候へ、これは君の御為に悪風とこそ覚えて候へ。あの雲砕けて御船にからば、君も全く渡らせ候ふまじ。我らも二度故郷へ帰らんこと不定なり」とぞ申しける。

(巻第四「義経都落の事」P. 205)

ここで弁慶は、平家の公達の残した言葉を引き、源氏は八幡の守護があるから安穩だが義経には平家の怨霊が祟る、と言う。義経は八幡の加護から漏れているという認識が弁慶によつて明示されているのである。

『義経記』後半、転落期の義経は源氏の系譜的正当性を主張できなくなるのが前章で確認された。都落ちの場面で引用の本文が語られることは、そのような頼朝による正当性の占有と呼応している。そしてまさにその正当性移行を描く対面場面において、義家が八幡に祈る様が頼朝の口から語られていた。その独自記事の意味はもはや明らかである。すなわち、源氏の系譜的正当性を義家に引き付けて強調することで、頼朝が義家に喩える自らを源氏系譜の中へ位置づけることをより明確に宣言する機能を帯びている、と解釈できるのである。裏を返せば、室町期当時において義家以来源氏の氏神であると認識されていた八幡神の記述は、源氏の系譜意識を明確化することで義経の疎外を際立たせる機能をも帯びていることになる。そのような意味で、義家が八幡神に祈るという一見不要にも見える『義経記』の独自増補記事もまた、実は極めて重要な役割を果たして

いると言える。

おわりに

以上、本稿では『義経記』巻第四「頼朝義経対面の事」における源氏先祖への言説について、まずプレテクストとの対照から、義家が八幡神に祈る記述・義経が頼朝を「故頭殿」に喩える記述という二つの独自記事を析出した。次に『義経記』における源氏先祖への言説を通覧することで、源氏の系譜的正当性とその移行という『義経記』に一貫した叙述原理を発見した。そして、これを享受者の既得知識とする観点から先の独自記事を読めば、源氏の系譜的正当性が義経から頼朝へ移行する対面場面を明確化する意味が読みとれることを述べてきた。最後に今後の課題と展望を述べて結びとしたい。

本稿では『義経記』の頼朝義経対面場面が、源氏の系譜的正当性を義経から頼朝へ移行させる言説によつて叙述されていることを実証してきた訳だが、テクストのそのような意味が享受者の既得知識によつて支えられる形で叙述されていた。『義経記』独自記事である義経が頼朝を「故頭殿」に喩える記述は、義経が頼朝に呼応する形で語られており、ここに享受者が介入して初めて、源氏の系譜的正当性が義経から頼朝に移行する文脈が際立つ仕組みである。『義経記』本文に即して考えれば、頼朝と義経の君臣契約という形によつて、源氏の系譜的正当性からの義経疎外が開始された、と言える。しかしそのように考

えた時、この場面の義経はあまりにも無抵抗である。自主的に頼朝を「故頭殿」に喩える義経の姿は、兄頼朝と抗争せず、むしろ自分から兄に献上する形で、源氏の系譜的正当性から退いてゆくように見える。誤解を恐れずに言えば、義経の疎外が頼朝と義経自身との共犯関係によって決定的となっているのではないか、ということである。

疎外される主人公の側から語られる「系譜的正当性とその移行」の物語である以上、その叙述は正当的系譜に対する主人公の劣位性と同時に、その主人公がかつては正当的系譜の側にあったのだということ強調して語らなければならない。従って『義経記』の場合、義経の出自としての源氏の正当的系譜は否定されてはならないことになる。つまり、義経の無抵抗な描かれ方は、義経が主人公としての正当性を確保し続けるための叙述方法であったと考えることができる。義経の疎外を描くにも関わらず安定した君臣関係が前提とされるからこそ義経の貴種性、頼朝の弟という権威が維持できる構造である。ならば「源氏の系譜的正当性とその移行」の物語とは、疎外される側が疎外する側に共犯しその権威に乗じるといふ、転倒した正当性の主張であったということになる。このような転倒した正当性の主張という視角は、最初に述べた大津氏の理論と『義経記』との距離を説明するための、また近世へとつながってゆく「判官鼠胤」の構造を説明するための、有効な手がかりとなるだろう。これらについては後日を期したい。

注

(1)『東北文学の研究』(新装版)定本 柳田国男集 第七巻」p. 352、筑摩書房、初出一九二六。

(2)柳田氏の『義経記』論は文学における口頭伝承の参加、及び非文字的文学の価値に主眼を置くものであったが、以後も現在に至るまで『義経記』はその知名度に比して決してメジャーな研究対象とは言えない。その反省から近年では、『義経記』作者の主体性を追求することで、物語内容よりも表現の中に一貫性を求めようとする議論が盛んである。例えば、村上学氏の「面白い遊びの精神」(「語り物の諸相」『日本文学新史 中世』至文堂、一九八五)、小林美和氏の「人格の反転」(「語りの中世文芸」和泉書院、一九九四)、利根川清氏の「諷刺」(『義経記』の笑いの方法)「軍記と語り物」31、一九九五)、佐倉由泰氏の「恣意と視線」(『義経記』の世界)『信州大学人文学部人文科学論集』(文化コミュニケーション学科編) 31、一九九七)、刑部久氏の「華飾の表象」(『義経記』の方法)『軍記文学研究叢書』11曾我・義経記の世界』汲古書院、一九九七)、三澤裕子氏の「肉親の結束」(『義経記』成立論の問題点)前掲『軍記文学研究叢書』等の切り口がある。なお、参考文献の副題は省略した。以下同じ。

(3) 翰林書房、二〇〇五。本稿では「論理的枠組み」という言葉を用いたが、大津氏はこれを「物語」というタームで示し、歴史の「物語への翻訳の装置、物語の根幹を構成す

る構造」(p. 31)と説明されている。

(4)この点について、著書の「終わりに」には以下のように書かれている(p. 395)。

『義経記』を対象としなかったのは、それが『冒我物語』

のように歴史叙述を欲望していないと判断したから

である。軍記を、ごく単純に、「権力をめぐる武力闘

争を記した共同体の歴史叙述」と規定するなら、『義

経記』は、源義経の個人の歴史は記していても、共同

体の歴史は記していない。『義経記』を論じるには、

また別の視線が必要である。

しかし本稿では、氏の言う「軍記」の枠内で『義経記』を捉える可能性を論じる。

(5)正確な成立年代が明らかでなく貴賤上下に享受された『義

経記』の享受者を厳密に定義するのは難しい。例えば『看

聞日記』応永二十七年(四二〇)正月十一日条にある「入

夜松拍参、種々風流地下九部宮典有其興、酒肴賜之」との記

事(引用本文は図書寮叢刊に依る)から、少なくとも十五

世紀前期以降の京都における、公家から地下に至る人々に

とって、〈義経の物語〉はよく知られていたことがわかる。

本稿では「享受者」という言葉を度々用いるが、そのよう

な広い意味での享受者を想定している。なお本稿では、そ

のような享受者に想像されたであろう一連の顛末を、文字

テキストとしての『義経記』と区別して〈義経の物語〉と

呼ぶことにする。

(6)和辻哲郎『日本倫理思想史 上』岩波書店、一九五一

(7)現時点で最新のものは徳竹由明氏の『義経記』に於ける頼朝義経兄弟対面(『国語国文』75-6、二〇〇六)であるが、

氏は本場面に見られる特徴を、坂東武士の希薄化・頼朝義

経兄弟の絆の強調・八幡神の記述増補という三つの観点から

分析され、『義経記』全体として頼朝義経の対立関係が

免罪されるよう叙述が組み立てられていることを実証されて

いる。またその注において本場面の先行研究を整理して

おられるが、本稿もこれらの研究成果による恩恵を大いに

被っている。なお、羽原彩氏(『源平盛衰記』頼朝拳兵譚

における義家叙述の機能)『国文学研究』140(二〇〇三)は『源

平盛衰記』における源氏先祖への言説を分析する過程で頼

朝義経対面場面にも触れられている。その分析対象に『義

経記』は入っていないものの、本稿は羽原論文に多大な示

唆を受けたものである。

(8)『平家物語の展開と中世社会』(汲古書院、二〇〇六)にま

とめられている。

(9)『義経記』本文は新編日本古典文学全集(小学館、

二〇〇〇。田中本)に依拠し、引用に際しては巻数、章段

名、頁数を付記した。適宜田中本影印を参照した他に、日

本古典文学大系『義経記』(岩波書店、一九五九。十二行

木活字本)と貴重古典籍叢刊『赤木文庫本 義経物語』(角

川書店、一九七四。赤木文庫本)を対照したが、異同に問

題のある場合はその都度言及してある。

(10)本文中「二三年の合戦」という部分には問題がある。十二行木活字本や赤木文庫本も「二三年の合戦」、田中本の影印を確認しても「二三年」となっている。このような呼ばれ方をする合戦はなく、直後に語られる内容から推して「後三年の合戦」とあるべき。「二三年」の誤写である可能性が考えられる。実際、田中本『義経記』巻第八「衣川合戦の事」には「後三年の戦ひ」という用例があるが、影印では「二三年の戦ひ」となっている。

(11)「三代」は、頼朝義経兄弟の祖父である為義が、その祖父義家の養子となり嫡流を継いだことを前提とした数字。

(12)表作成に当たって参照した本文は以下の通り。『奥州後三年記』は群書類従。『吾妻鏡』は新訂増補国史大系(吉川弘文館、一九三二〜一九三三)。『平家物語』延慶本は『延慶本平家物語 本文編 上・下』(勉誠社、一九九〇)。『平家物語』四部合戦本は『四部合戦本平家物語』(汲古書院、一九六七)。『源平盛衰記』は中世の文学『源平盛衰記(四)』(三弥井書店、一九九四)。『源平闘諍録』は『内閣文庫蔵 源平闘諍録』(和泉書院、一九八〇)。『平治物語』は新日本古典文学大系『保元物語 平治物語 承久記』(岩波書店、一九九二)。なお、『奥州後三年記』は貞和三年の序文を持つが、野中哲照氏(『奥州後三年記』の成立年代)鹿兒島短期大学研究紀要56、一九九五)はこの物語本文の成立を一二〇年代と結論されている。今のところ有力な反論は出ていないようなので、ここでは野中氏の説に従っ

た。また、『平家物語』長門本では対面場面自体は描かれるものの、源氏先祖への言説はない。『平家物語』語り本系諸本や『平治物語』金刀比羅本には頼朝と義経の対面場面自体が描かれていない。

(13)例えば美濃部重克・松尾葦江校注の前掲『源平盛衰記(四)』P.155では「左兵衛尉義綱」を頭注で「左兵衛尉義光の誤り」と説明されている。

(14)注(7)徳竹論文。

(15)「三代」「四代」は為義が祖父義家の養子となり嫡流を継いだことを前提とした数字。

(16)なお、今回は扱わなかったが、清和源氏の祖である天皇の諡号「清和」の用例について付言しておく。「清和」の用例は全九例であるが、その全てが、義経は清和天皇の子孫であるとの文脈で語られる。前半には一例しか見られず、義経が自らを称する例もやはり一例しかない。主に義経が追われる身となる『義経記』後半において、義経の周辺人物が、義経の高貴な出自を強調する表現に用いられていると言える。

(17)基本的に、というのは、弁慶との対決に義経の名乗りが現れないなど、必ずしも先祖に言及されない箇所もあるためである。例えば室町末の書写になる「武蔵坊縁起」(新日本古典文学大系『室町物語集 下』に徳田和夫氏の校注あり)では双方が先祖以来の系譜を高らかに名乗る場面があるが、『義経記』ではこの場面が採用されていない。とは

いえ、『義経記』前半を見渡す限り、義朝の子であるという要素が義経の活躍の一つの原動力となっていると見ることは妥当であると思われる。野中直惠氏（『義経記』の『芸世界』前掲『軍記文学研究叢書』）も編集者の構想を追究する立場から類似の指摘をされている。

(18) なお、頼朝義経の関係については重要な問題であるため、稿を改めて論じる必要がある。

(19) 『義経記』を語り物として捉えれば、後の言葉が述べられる時には前の言葉が忘れられるため不自然とは感じられないと考えることもできるだろう。しかしここでは少し別の視点からこの記述の意味を考えてみたい。

(20) 柳田国男前掲論文等。

(21) 注(2)に挙げた村上孝氏以来の諸議論参照。

(22) 注(5)参照。また、三澤祐子氏前掲論文は本場面引用部末尾の地の文に現れる義経への評語「哀れなれ」に、本稿と同じく享受者の既得知識との響き合いを読み取る。

(23) 羽原彩氏前掲論文は『平家物語』『保元物語』『平治物語』諸本における源氏先祖への言説を分析し、後出本では源氏系譜における先祖として主に義家が強調されるようになることを証明されている。そのような状況が生まれた厳密な時期は明らかでないが、『義経記』の享受者にとっても「義家」は源氏の系譜的正当性を象徴する意味を帯びてイメージされたと思われる。

(24) 前掲新編日本古典文学全集『義経記』の頭注では、「厨川

の辺で王城を伏し拜むというくだりは、『陸奥話記』に見える義家の父頼義の逸話を誤り伝えたものらし」と説明されている。しかし例えば寛一本『平家物語』では富士川の勝利の後頼朝が「王城の方を伏し拜」んで八幡神の加護を語る場面があり、さほど希少な描写ではなかったと考えられる。

(25) 『十輪院内府記』文明十三年（一四八二）三月二十五日条には記者中院通秀に平野社祠官である兼俱が語った言葉として「凡源氏々神、以平野社為正也、於八幡宮、清和源氏義家以来事也云々」との記事がある（引用本文は史料纂集に依る）。中院流は村上源氏であり、兼俱が「平野社」の重要性をアピールしているわけだが、清和源氏にとつては「八幡宮」が「義家以来」氏神として扱われていることがわかる。宮地直一氏（源氏と八幡宮）中野幡能編『八幡信仰事典』戎光祥出版、二〇〇二）はこれを当時の「流布の説」であったと分析されている。

(26) 徳竹氏前掲論文、中村和子氏「中世軍記物語と八幡信仰」（志村有弘・高橋貢・奥山芳広編『八幡神社の研究』叢文社、一九八九）。

(27) 但し、赤木文庫本および十二行木活字本では平家公達の台詞に脱文があるらしく、文意が不明瞭。

（やぶもとかつはる／本学大学院修士課程）

<p>卷第五</p> <p>判官吉野山に入り給ふ事  静吉野山に捨てらるる事  義経吉野山を落ち給ふ事  忠信吉野に止まる事  忠信吉野山の合戦の事  吉野法師判官を追ひかけ奉る事</p>	<p>義朝</p>	<p>義経</p>	<p>忠信に託した義経の刀の伝来</p>
<p>卷第六</p> <p>忠信都へ忍び上る事  忠信最期の事  忠信が首鎌倉へ下る事  判官南都へ忍び御出である事  関東より勧修坊を召さるる事  静鎌倉へ下る事  静若宮八幡宮へ参詣の事</p>	<p>義朝  義朝  義朝  義朝</p>	<p>佐藤忠信  地の文  勧修坊  地の文</p>	<p>義経と頼朝の出自  勝長寿院の紹介  勧修坊の出自  勝長寿院の紹介</p>
<p>卷第七</p> <p>判官北国落の事  大津次郎の事  愛発山の事  三の口の関通り給ふ事  平泉寺御見物の事  如意の渡にて義経を弁慶打ち奉る事  直江の津にて笈探されし事  亀割山にて御産の事  判官平泉へ御着の事</p>	<p>義家</p>	<p>地の文</p>	<p>直江津花園観音堂の本尊の由来</p>
<p>卷第八</p> <p>秀衡死去の事  秀衡が子共判官殿に謀反の事  鈴木三郎重家高館へ参る事  衣川合戦の事  判官御自害の事  兼房が最期の事  秀衡が子供御追討の事</p>	<p>義朝  義朝  義家</p>	<p>義経  基成  兼房</p>	<p>義経庇護の系譜  基成と義経の関係  兼房と義経の関係</p>

巻数・目録	先祖名	話者	文脈
<b>巻第一</b>			
義朝都落の事	義朝	地の文	義経の出自
常盤都落の事			
牛若鞍馬入の事	義朝	常盤・別当	義経鞍馬入りの契機
少進坊の事	為義・義朝	地の文	少進坊の出自
	義朝	少進坊	義経の出自
牛若貴船詣の事			
吉次が奥州物語の事	義朝	吉次・秀衡	義経の出自
	頼義・義家	吉次	源氏奥州征討の歴史
遮那王殿鞍馬出の事	義朝	義経	義経の出自
<b>巻第二</b>			
鏡の宿吉次が宿に強盗の入る事	義朝	長者・義経	義経の出自
遮那王殿元服の事	義朝	地の文	熱田宮と源氏の関係
	為義・義朝	義経	義経の出自
阿濃禪師に御対面の事	義朝	阿濃禪師	阿濃禪師の出自
義経陵が館焼き給ふ事	義朝	義経	義経の出自
伊勢三郎義経の臣下にはじめて成る事	義朝	義経	義経の出自
	義朝	伊勢三郎	伊勢三郎の出自
義経はじめて秀衡に対面の事	義朝	泰衡	義経の出自
義経鬼一法眼が所へ御出の事	義朝	義経・鬼一等	義経の出自
<b>巻第三</b>			
熊野の別当乱行の事			
弁慶生まるる事			
弁慶山門を出る事			
書写山炎上の事			
弁慶洛中にて人の太刀を奪ひ取る事			
弁慶義経に君臣の契約申す事			
頼朝謀反の事	為義・義朝	加藤景員	頼朝の出自
頼朝謀反により義経奥州より出で給ふ事			
<b>巻第四</b>			
<b>頼朝義経対面の事</b>	義朝・義家	頼朝・義経	(本稿で分析)
義経平家の討手に上り給ふ事			
腰越の申状の事	義朝	義経	義経の出自
土佐坊義経の討手に上る事			
義経都落の事			
住吉大物二か所合戦の事			